

論文の内容の要旨

論文題目 「満洲」移民の「国策文学」とイデオロギー
—日本、朝鮮、中国をめぐって

氏名 安志那

本研究は、主に国策団体である農民文学懇話会と大陸開拓文芸懇話会によって創作された「満洲」移民の国策文学を、イデオロギーを軸にして、具体的な作品分析に基づいて検討するものである。

第1章では、農民文学懇話会と大陸開拓文芸懇話会の国策団体としての設立の経緯を通して、それが日本政府の文化統制に対する転向作家の圧迫感、東京文壇への反発や日本民族の大陸進出としての「満洲」移民に対する共感などの要素が複雑に絡み合って「協力」の論理を形成していたことを確認した。また、それは徴兵・軍需産業・「満洲」移民など諸政策において人的資源の源泉である「内地農村」に対する関心を背景とするものでもあった。

だが、両懇話会が国策協力に邁進した時、現実における「満洲」移民の論理はその限界を露呈し始めていた。両懇話会は「満洲」の移民地・訓練所などを「視察」旅行し、観察・研究することで創作の題材を発見した。そのため、「満洲」移民の国策文学は、現実をありのまま描写する「報告文学」として捉えられ、そのテキストにおける「満洲」移民を正当化するイデオロギーと現実との様々な矛盾や倒錯が読み取られることは殆どなかったのである。

しかし、「内地」の国策団体の「視察」を迎えた「満洲」文壇は、決して一枚岩ではなかった。在満日本文学者は「満洲国」独自の文学を論じ、その一部は植民者としての自意識に基づいて「満洲」移民とそれを翼賛する国策団体・文学に批判的な視線を向けた。

第2章では、「満洲」をめぐるイデオロギーの遷移を具体的に検討する。それは、第1章で確認できる「満洲」移民の国策文学の複雑な位置や一部の作品で認められる矛盾や錯綜を、その政治・社会・イデオロギーの流れから読み取るためである。したがって、本章では、関東軍の満蒙領有論からはじまり、建国イデオロギーとしての民族協和と王道主義の台頭と「満洲国」建国後の排除の過程、「八紘一宇」による統合、戦後日本における「満洲」体験者の記憶と語りによって構築された理想国家建設のイメージまで考察した。

第3章から第6章までは、「満洲」移民に関わる歴史学及び社会学の研究成果を取り入れながら、「満洲」移民の国策小説を分析することで、多様な側面からその限界と可能性を捉えることを試みた。

第3章では、朝鮮人の「満洲」移民を題材とした張赫宙『開墾』（1943）を分析した。同作品は、東京文壇における朝鮮人作家である張が自分の文学のルーツともいえる「万宝山事件」（1931）を小説として再構成した作品である。『開墾』において、「万宝山事件」を経験した朝鮮農民は、領事館警察の介入を通じた帝国の「保護」に感動し、その秩序が続くことを願うようになる。だが、彼らは「満洲国」建国のスローガンにも一切関心を示さない。この矛盾は、『開墾』が国策に積極的に協力するための国策小説でありながら、朝鮮農民の立場から描くことに徹底しているために生じたものであると考えられる。読者が朝鮮農民を同じ「帝国の臣民」とであると認める時、『開墾』の論理はその破綻を回避できる。

しかし、「満洲国」建国後は、在満朝鮮人の「日帝の手先」としての効用性は消え、「満洲開拓」の主役として期待されたのは「日本人」の開拓団であった。そのような状況で、張は12年も前の「半島人同胞の苦難」を描くことで、帝国と朝鮮農民の利害が合致していた頃の記憶を蘇らせようとしたのである。

第4章においては、第2次移民団の「満洲」移民を題材とした湯浅克衛「先駆移民」（1938）を通して、現地住民と日本人移民者の間で起きた武力衝突の様相を検討する。同作品は、在郷軍人で編成された武装移民団の入植を契機として勃発した現地住民の「反満抗日」の武装闘争である「土竜山事件」（1934）を描いた作品である。この作品は、同事件の主な原因である土地問題を「回避」したため、湯浅の国策への傾倒を示す作品としてみなされてきた。だが、「先駆移民」は第2次移民団の入植から「土竜山事件」勃発までの過程において、武器の応召が象徴する現地住民と日本人移民者の非対称な関係と、それに起因する武力衝突への過程を描写している。「先駆移民」において、「満洲移民」は暴力に基づいているものとして描写されているのである。この小説において浮かび上がる「満洲開拓」の論理は、日本人の「満洲」移民を正当化するというより、その破綻と矛盾を逆証している。

第5章では、第1次移民団の入植を描いた打木村治『光をつくる人々』（1939）を分析した。同作品は、「先駆移民」とほぼ同時期に行われた第1次移民団の入植過程を追っているが、結局「匪賊」は討伐され、移民団は「内地」から「花嫁」を迎えて明るい未来を約束する結末で終わる。しかし、「日本人」だけで構成された均質な「開拓」の物語に現地

女性が登場した時、「満洲」移民の論理はその閉鎖性を露呈させる。結果として、彼女は「言葉」を失い、彼女の感情と意思は配偶者となる日本人男性移民者によって代弁され、結末の移民団の合同結婚式では完全に「包摂」されたかのように見える。

しかし、混血児の存在は、移民団の合同結婚式が象徴する「明るい未来」の基盤となる「日本民族」の排他的民族主義にとって、決して容認され得るものではない。何故なら、「満洲」移民政策においては、その中核たる「大和民族」の異民族との混血は徹底して排除されていたからである。この「混血融合」は、「征服」された他者の「包摂」の象徴として物語に組み込まれているが、それは「国策」の観点からすれば日本民族の血統を「汚す」ことにはかならず、その意味においてこの作品は国策に反する側面を持っている。

これまで検討した張赫宙『開墾』（1943）、湯浅克衛「先駆移民」（1938）、打木村治『光をつくる人々』（1939）は、移民者が「満洲」で遭遇する様々な困難に焦点を置き、さらに初期移民に注目するものである。比して、第6章で考察した徳永直「先遣隊」（1939）と和田伝『大日向村』（1939）は、徹底して日本人「満洲」移民の送出における「内地」側の論理に依拠している。両作品は、「満洲」移民が戦争遂行の「精神主義」に傾倒していく現実を背景として、日本人農民の大量移民を可能にする分村移民の必要と効果を強調し、その重要性を喚起させるという国策小説としての目的が最も顕在化した作品であるといえる。

徳永直「先遣隊」で、先遣隊の青年は適応障害である「屯墾病」に罹り、故郷に戻る。だが、彼の眼に映る故郷の風景は戦争遂行のための労働力不足を露にした姿であり、分村移民の呼びかけについて村人は不安と距離感を示している。青年は分村移民に参加することで再度「満洲」に渡るが、結局「屯墾病」の原因となった「満洲」の諸条件は変わっていない。「先遣隊」で描かれる「内地」農村の現実と先遣隊員が掲げる「満洲」移民の論理は乖離したまま終わるのである。

和田伝『大日向村』は、分村移民のモデルケースとして華やかに宣伝された長野県の大日向村の分村移民を小説化したものである。作家の和田が自ら語ったように、ルポルタージュのような事実と虚偽を「交差」させながら、大日向村の分村移民推進の様子を描いている。

『大日向村』において村長を中心とする移民推進派は、数字や統計、理論を持ち出して「満洲」移民が如何に合理的で有益であるかを説得する。しかし、彼らが堂々と語る目的とは、村の負担となる「過剰人口」を「満洲」に送出することで、移民者が手放す家屋や小作地、土地を手に入れて母村が「更生」することである。

そして日中戦争を契機に、母村の更生という目的は、国策協力へと転換される。農村窮乏を解決するための手段であった「満洲」移民そのものが目的となり、大日向村の分村移民の進行は日中戦争と正確に重なって展開される。「満洲」移民は国のための「大陸への渡洋挺身」となったのである。

徳永直の「先遣隊」と和田伝の『大日向村』は、文学作品を通して同時代の国家権力に

積極的に協力し、「満洲」移民が農民と農村にとっても「有益」であると形象化した。しかし、作家が「満洲」移民の単なる障害物、或いは農民の無知と愚かさ、狡猾さの証拠としてしか捉えられなかったものが、彼らの作品には生々しい形で散在している。故郷への愛着や異国への移住に対する抵抗感は、政策側の単純な損得の計算を超え、民衆の中に様々な形で根強く存在した。また、「満洲」移民に対する中小地主、自作農、小作農の利害関係は複雑に絡み合い、政策側の理想からは程遠いものであった。

ここまでの作品分析を踏まえると、「満洲」移民の国策文学が単なる「帝国の声」の再生産ではなく、「内地」と「満洲」との間において展開された様々な層位の人々の生と言説を文学の中に取り込み、結果として亀裂や矛盾を呈していたことを確認できる。

まさにそうした点において、「満洲」移民の国策文学の逆説的な価値が存在すると考えられる。すなわち、「国策の線に沿って」創作された国策文学は、帝国の「声」を再生産するにあたって、「満洲」移民において無数の「小声」を拾い上げた。それは時に、移民政策に対する密かな批判や懐疑を乗せ、あるいは帝国日本の国策移民政策における露骨な戦争遂行の論理と排他的民族主義を謳いながら、完全には排除できない大衆の言葉を語ったのである。作品分析において具体的に検討したように、帝国の文学が植民地を捉え、分析し、取り込もうとする語りのイデオロギーが孕む倒錯を発見する本研究の実践は、今まで殆ど省みられることのない国策文学の時代を、より多様に、豊かにする契機を提供できる。また、本研究の問題意識と成果は、北海道「開拓」文学から戦後「引き揚げ」文学へと続く連続性の中で、さらに検討されるべき問題として発展させられると考える。